

目次

凡例 ix

第一章 天（あま・あめ）と国 1

序 1

一 「天つ神」・「国つ神」の名告りと婚姻 1

二 「高天原」と「葦原中国」の流動化と差異化 4

三 「高天原」と「葦原中国」の固定化と確立 6

四 「天の香具山」・国見・祭祀 9

五 「天の香具山」・「神あがり」・黄泉国 11

六 異界の国との境界——「黄泉ひら坂」・海坂—— 14

結 17

第二章 スサノヲ・根の国・出雲

——古事記・日本書紀の表現を通して—— 21

第三章

国作り考

序	21
一 スサノヲの名義・内実と「泣く」行為	22
二 「海原」・「天の下」・「根の国」	24
三 「神やらひ」・「罪」・「はらへ」	26
四 スサノヲの出雲への降臨	29
五 スサノヲの御歌	31
六 古事記における「根堅州国」のスサノヲ	33
結	36
序	41
一 オホクニヌシとスクナヒコナの国作り	42
二 「告」と「詔」	45
三 倭御諸山・オホモノヌシ	47
四 「なる」・「生む」・「作る」	49
五 国作りの範囲	51

六	オホクニヌシとオホモノヌシの宮の造営と祭祀	54
結		57

第四章

アメノホヒ考	59
--------	----

序	59
一 アメノホヒの出生	60
二 アメノホヒの「媚び」	62
三 「媚び」の用例と解釈	63
四 出雲国造神賀詞の奏上儀礼とテキスト	67
五 「言向け」・問答・「媚び」	70
六 祭祀と「媚び」	72
結	74

第五章

アヂスキタカヒコネ考	77
------------	----

序	77
一 アヂスキタカヒコネの出自と役割	77

第六章

オホナムチ・オホクニヌシ・出雲大神

——「国譲り」と崇り神——

二	古事記のアズシキタカヒコネ	80
三	日本書紀のアズシキタカヒコネ	82
四	出雲国風土記のアズシキタカヒコ	83
五	古事記の「今」	88
六	アズシキタカヒコネとコトシロヌシ	90
結		93
序		95
一	「国譲り」1	95
二	「国譲り」2	98
三	「国譲り」3	100
四	「言向け」の論理	102
五	出雲大神の崇り	104
六	出雲のヒメと出雲大神への祭り	107

七	出雲の神宝と出雲大神への祭り	109
八	その後の崇り神としての出雲大神	111
結		113

第七章

出雲から見た「国譲り」

—— 出雲国風土記母理郷と出雲国造神賀詞 ——

序		117
一	出雲国風土記の「天の下」と「天降り」	118
二	風土記の「平け」 ことむ	122
三	自敬表現	124
四	「依さし」と「言依さし」	126
五	宮の造営と「静まる」	128
六	出雲国造神賀詞のアメノホヒ	131
結		134

第八章 動詞から見た「国譲り」

——古事記・日本書紀の「隠^{かく}る」・「避^ひる」を中心として——

序	137
一 「譲る」と「奉（献）る」	138
二 日本書紀・古事記の「避る」	140
三 出雲国造神賀詞の「避る」	142
四 「隠る」・「八十 ^{やそく} 垵手」・「幽」	144
五 「隠る」と「隠身」	147
六 「鎮まる」	149
七 「避る」・「隠る」のその後	154
八 出雲大神とコトシロヌシ	156
結	160

第九章 オホモノヌシ考

——「依り来る」神の両義性——

序	163
——「依り来る」神の両義性——	163

一	神代記(紀)の「依り来る」神との問答	163
二	倭と御諸山(三輪山)	166
三	崇神記(紀)と神代記(紀)	167
四	オホモノヌシの名義と王権との関わり	170
五	御諸山と香具山	172
六	丹塗矢神話の「依り来る」神	175
七	三輪山神話の「依り来る」神	177
八	箸墓神話の「恥ぢ」とヒメの死	179
結		181

第十章

タカミムスヒとカミムスヒ

——高天原・葦原中国・出雲——

序		185
一	高天原と「隠身」	185
二	オモヒカネ・タカミムスヒ・タカギノ神	188
三	タカミムスヒとアマテラス	192

四	カミムスヒ	195
五	「国譲り」におけるカミムスヒとタカミムスヒ	198
結		202
第十一章	アメノウズメとサルタビコ	
	——天石屋戸と天孫降臨——	205
序		205
一	「神がかり」の諸相	206
二	アメノウズメの所作とサルタビコとの問答	208
三	サルタビコの所作とアメノウズメとの問答	212
四	「神がかり」と「俳優」	216
結		219
初出一覧		223
あとがき		225
索引		001

凡 例

一 注は各章末尾に挙げた。

一 古事記の引用は、新編日本古典文学全集『古事記』（小学館）にほぼ従い、一部私に改めたところがある。傍線等は稿者によるものである。

一 日本書紀の引用は、新編日本古典文学全集『日本書紀①、②、③』にほぼ従い、一部私に改めたところがある。傍線等は稿者によるものである。

一 出雲国風土記、播磨国風土記、常陸国風土記等の風土記の引用は、新編日本古典文学全集『風土記』（小学館）にほぼ従い、一部私に改めたところがある。傍線等は稿者によるものである。

一 万葉集の引用は、新編日本古典文学全集『万葉集①、②、③』（小学館）にほぼ従い、一部私に改めたところがある。傍線等は稿者によるものである。

一 出雲国造神賀詞、延喜式祝詞の引用は、日本古典文学大系『古事記 祝詞』（岩波書店）、にほぼ従い、一

部私に改めたところがある。傍線等は稿者によるものである。

- 一 延喜式神名帳の引用は、新訂増補国史大系『延喜式』（吉川弘文館）に従った。傍線等は稿者によるものである。

- 一 古語拾遺の引用は、新撰日本古典文庫『古語拾遺』（現代思潮社）にほぼ従い、一部私に改めたところがある。傍線等は稿者によるものである。傍線等は論者によるものである。

- 一 続日本紀の引用は、新日本古典文学大系『続日本紀一、二、三』（岩波書店）にほぼ従い、一部私に改めたところがある。傍線等は稿者によるものである。

- 一 古今和歌集の引用は、新日本古典文学大系『古今和歌集』（岩波書店）にほぼ従い、一部私に改めたところがある。

- 一 日本霊異記の引用は、新編日本古典文学全集『日本霊異記』（小学館）にほぼ従い、一部私に改めたところがある。傍線等は稿者によるものである。

第一章 天（あま・あめ）と国

序

本章では、「天つ神」と「国つ神」、「高天原」と「葦原中国」、「黄泉国」、「根の国」、「海神の国」などを取り上げる。「天つ神」と「国つ神」などは、一般的には相互に異界として対立する語句と見なされているが、その場合の対立の内実を問うていく。また、「天」が冠された地名、具体的には「天の香具山」を取り上げ、「天」を冠することにより、その地を異界化、神話化することの意味を考察する。更に、異界の国との境界におけることばがクローズアップされることなど、それぞれの具体例を通して検証していく。

一 「天つ神」・「国つ神」の名告りと婚姻

まず「国つ神」の用語例から見ていく。

「やつかれ僕は、**国つ神**、大山津見神の子ぞ。僕が名は足名椎あしなづちと謂ひ、妻が名は手名椎と謂ひ、女が名は櫛名田比むすめ売と謂ふ」。

（神代記）

右は、スサノヲが高天原から追放されて出雲に降り立ち、尋ねて行ったところで老夫婦と童女に出会い、名を聞いて「国つ神」が答えた場面である。その後にスサノヲが「天照大御神の伊呂勢いろせぞ、故、今天より降り坐し

ぬ」と素性を明かすことから、これが、「天つ神」と「国つ神」との異界の者同士の出会いであることが明確化される。その後は周知の通り、スサノヲのヤマタノヲロチ退治とクシナダヒメとの結婚に至り、一般化して言えば、外来者が悪しき物を退治し内部の女性と婚姻してその王になり子孫を残すという外来王の様式に相当する。その後の高天原から派遣されるアメワカヒコも、葦原中国でオホクニヌシの娘のシタテルヒメを娶るという点では同断であるが、この場合は、高天原への復奏が勅命であったから、それを八年も怠り、さらに遣いの雉を射殺すことで、高天原の怒りを被り殺されてしまうという結末に至る。

外来王来訪という点で言えば、天孫ホノニギが降臨した際に笠沙の御崎で遭遇した麗しき美人に名を尋ね、「大山津見神の女神阿多都比売、亦の名は木花之佐久夜毘売と謂ふ」との答えを得たことも通じている。ここでは女性本人が名告っており、「国つ神」という語は用いられていないが、先のアシナヅチの名告りと対応させれば、オホヤマツミの系統ということで「国つ神」と言ってもよい。ただこの場合はオホヤマツミが姉のイハナガヒメとともに婚姻させようとしたところ、姉が醜い故に帰されてしまい、その結果、「天つ神御子」の命が永遠でないという起源に結びついている。その後、コノハナノサクヤビメが一夜で孕んだことでホノニギが「国つ神」の子ではないかと疑ったのに対して、サクヤビメは、もし「国つ神」の子ならば幸なく、「天つ神」の御子ならば幸くあらむとして、八尋殿に火を付け、ホヨリなど三人の御子を生んだという。続いてホヨリ（ヒコホホデミ）はワタツミノ宮（国）を訪問してワタツミノ神の娘トヨタマビメと婚して最終的にはウガヤフキアヘズという御子が生まれる。これも大枠で言えば外来王来訪の結果と捉えられる。

要するに、外来王来訪という観点で言えば、「天つ神」、或いは「天つ神御子」が「国つ神」の女と婚すること
で「国つ神」の呪力を得て、子孫を設けていくという展開に収斂する。但し、スサノヲの場合は、出自は「天つ

神」だが、高天原から追放されることにより、「国つ神」の女と婚することで「国つ神」の王と化し、その子孫は「国つ神」の系統となることとなる。後述するように、他の名告りも「国つ神」が「天つ神」や「天つ神御子」に対して行うことが多いのに比して、スサノヲが「国つ神」の名告りに応じたものであるにせよ、「天つ神」として「国つ神」に名告ることは異例である。

それらに対して、当然のことながら、婚姻や子孫に関わらない「国つ神」の名告りも見られる。ホノニギの天孫降臨に際して、「天の八衝やちまた」に居て、上は高天原を光し、下は葦原中国を光す神てら」があった。そこでアマテラスとタカギノ神がアメノウズメに命じて、「汝は（中略）いむかふ神と面勝神おもかつ」だから応じよとして、ウズメがその異界との境界である天の八衝の光る神に問うたところ、

「僕は、国つ神、名は猿田毘古神ぞ。出で居る所以ゆゑは、天つ神御子天降り坐すと聞きつるが故に、御前に仕へ奉らむとして、参る向へて侍り」
(神代記)

と名を明かし、「天つ神」を先導すると申したという。古事記注釈は、ウズメが面勝神とあり、日本書紀で「人に目勝つ者」と記されることから、目が異常に輝くシャーマンの姿を想定している。それに従えば、これも暴力的に光り輝くとされるサルタビコという「国つ神」の呪力をコントロールするワザをウズメの中に見ることも可能だ。それ以前に、同様に光り輝いていたアマテラスが天石屋戸こもに隠つたのをウズメが問答によりコントロールし得たこと(1)とパラレルでもある。

他に「国つ神」の名告りは神武記の東征に頻出する。速吸門はやすひのとで遭遇した「亀の甲に乗りて釣りをつつ打ち羽は挙あり来る人」に訪うところ「僕は、国つ神」と答えたという。ただその人には名がなく、「仕へ奉らむ」と言ったことで名を賜いて「槁根津日子ささ」と号したとあるが、名を与えることも相手の呪力をコントロールする

一つの方法である。神武記では割注で「此は倭国造等の祖ぞ」と付記する。その後の神武記では吉野で遭遇した「国つ神」が「贅持^{にへ}之子」、「井氷鹿^{みひか}」などと名告ったというが、これらは極狭い地域における「国つ神」でそれぞれ服従の意志を示している。

要するに、「天つ神」と「国つ神」の接触は、婚姻か服従の場合があり、ともに「国つ神」が「天つ神」にその呪力を賦与する意味合いがある。

二 「高天原」と「葦原中国」の流動化と差異化

前掲の神代記のサルタビコ出現の「上は高天原を光し、下は葦原中国を光す神」という記述を参照すれば、この時点では高天原と葦原中国とは通底していたことになる。それ以前、アマテラスが天石屋戸に隠^{こも}る場面でも同様のことが見られる。

爾くして、高天原皆暗く、葦原中国悉く闇^{くら}し。此に因りて常夜往きき。

(神代記)

アマテラスが天石屋戸に隠したことにより、高天原と葦原中国が連動して暗黒と化した。従って、この場面では高天原と葦原中国は繋がっていると観念されていたことになる。日本書紀では右のアマテラスが天石屋戸に隠った際の記述には「六合^くの内常闇にして、昼夜の相代^{あひかはるみき}も知らず」(神代紀七段正文)とある。「六合」は中国文献に例を見る天地と東西南北の四方を合わせた世界を指す語である。

それが天孫降臨の段階に至ると高天原と葦原中国が明確に差異化されていく。古事記ではアマテラスの仰せで「豊葦原千秋五百秋瑞穂国は我が御子(中略)知らさむ」と言依さし、それに応じたアメノオシホミミが天の浮橋に立たして「豊葦原千秋五百秋水穂国は、いたくさやぎてありなり」と告らしてアマテラスに報告したという。

同じ場面の日本書紀では次のように記述されている。

彼の地（葦原中国）に、多に螢火なす光る神と蠅声なす邪神と有り。復、草木咸能く言語あり。
（神代紀九段正文）

葦原中国は、磐根・木株・草葉も猶し能く言語ふ。夜は煙火の若に喧響ひ、昼は五月蠅如す沸騰る。
（神代紀九段一書六）

表現が異なっているにせよ、古事記、日本書紀いずれも葦原中国が高天原とは異質な邪惡な神などによって支配されており、それを「言趣（言向）」けるために高天原から神を派遣させるという展開となる。松田浩は古事記の「さやぎて」と書紀の「草木言語」などに表現的差異を見るが、とりあえず前者が和語的で後者は漢語的表記であることは言える。「さやぐ」は、神武記（紀）において神武一行が熊野をえ（失神）した際、熊野の高倉下の夢にアマテラスが顕れ天孫降臨が再現される場面にも見られる。

葦原中国は、いたくさやぎてありなり。

（神武記）

夫れ葦原中国は、猶し聞喧擾之響焉。

（神武即位前紀）

また、「蠅声なす」などの表現は、周知の通り、スサノヲがイザナキの命に従わずに泣きいさちる場面、アマテラスが天石屋戸に隠る際にも用いられる。

悪しき神の音、狭蠅の如く皆満ち、万の物の妖、悉く発りき。

（神代記）

万の神の声は、狭蠅なす満ち、万の妖は悉く発りき。

（神代記）

右の一例目は高天原における件で、二例目は前掲の引用に続く記述で、高天原と葦原中国の双方に対する描写である。従って、無秩序の混沌たる悪しき状態は、神代の当初は高天原でも起こり得たが、天孫降臨に際しては

専ら天孫降臨以前の葦原中国の悪しき状況を示す指標となっている。

ここで今一つ注目されるのは、古事記で天孫降臨以前の地上を「豊葦原千秋五百秋瑞穗国」と美称で呼んでいる点である。これは彼の地が「さやぎてあり」ながら、やがて天孫降臨以後は「さやぎ」がコントロールされ、天孫が支配、或いは言向けし実り豊かな地になることを予兆して名付けられたものである。ということは、天孫降臨して葦原中国を「言向け」することにより、高天原が葦原中国の上位に位置付けられたことを示しており、それ以前は、高天原も混沌たる「さやぐ」、或いは「万の妖」を包摂する世界であったと捉えられている。

例えば、神代記でスサノヲが地上に追放されるに際してアマテラスに暇乞いに参い上った時、「山川悉く動み、国土皆震ひき」とされ、アマテラスはスサノヲが「我が国を奪はむ欲へらくのみ」と言われて武装する場面がある。ここでは高天原は「国」とも称され、奪われ「山川悉く動」む混沌たる世界に至る可能性もある危機的な状況と化していたのである。その危機的状況はアマテラスとスサノヲとのウケヒにより、一旦は解消されそうになったが、そのウケヒ後のスサノヲの「勝さび」により、危機的状況は更に拡大して、アマテラスの天石屋戸隠りに展開するのである。この辺りの高天原は混沌状況と紙一重であると言ってもいい状態として記述されている。つまり、「高天原」、「葦原中国」ともに、アンダソヴァ・マラルが指摘するように、状況により変貌、変容していく⁽³⁾とも、或いは流動化しているとも言い得る。

要するに、神代記（紀）の中では、「高天原」と「葦原中国」は流動化から差異化の方向へ変容していくものと捉えられる。

三 「高天原」と「葦原中国」の固定化と確立